その声は〝地方〟を超えて

2～3面　寄稿『地方女子たちの選択』
協力ライター　藤井聡子

4～5面　寄稿「地方女子プロジェクト」代表　山本蓮

The Young Women's Christian Association
YWCA

〈第34総会期主題聖句〉
平和を実現する人々は幸いである
―マタイによる福音書5章9節―

〈ビジョン〉
女性がリーダーシップを発揮し、
人権・平和・環境を大切にする社会

〈ミッション〉
若い女性をエンパワーし、共に社会変革を進めます。

〈バリュー〉
キリスト教基盤　平和・環境　人権　セーフスペース

4
APRIL
2026
No.791
Since 1905

イラスト／惣田紗希

富山で女性たちの語りを聴いて

"地方"の向こうに広がる一人ひとりのストーリー

ライター 藤井聡子

若年女性の転出が地方の課題として議論されている。しかし、そこから女性たちの声は聞こえてこない。昨年刊行された『地方女子たちの選択』は、富山に縁のある多世代の女性たちの語りをていねいに聞き取ることで、「地方」という言葉の向こうにある事実を明らかにした。

多様に重なる選択の足跡をたどる

東京一極集中が続き、地方では若い女性の流出が止まりません。富山県では20～24歳の女性の流出が著しく、出産が減ることで人口減少が加速すると指摘されてきました。県は婚活イベントの開催、経済支援、雇用創出などの施策を行っていますが、流出を防ぐ効果は見受けられません。そもそも出産ありきで地域に引き留めるのは、若年女性に人口減少の責任を押し付け、命がけの役割を課すことにほかなりません。その暴力性を、国や県は自覚できているのでしょうか。

『地方女子たちの選択』では、富山に縁のある14人の女性たちの声に耳を傾け、地方の実情をひも解きます。富山に留まる人、Uターンした人、移住した人、出て行った人。20代から60代までの既婚者、離婚経験者、独身といった幅広い層の女性に取材しました。聞き取りをした私も、東京からのUターン組・独身です。家父長制の思想が根強く残る富山で、女性たちは何を選び、選べなかったのか。彼女たちのライフストーリーからは、さまざまな選択を重ねた足跡がうかがえます。

「家にとらわれず自由に生きてほしい」

日本有数の〝保守王国〟である富山は、持ち家率や三世代同居率の高さでも知られています。共働きの夫婦の子育てを、同居する両親・義両親が支える体制は一見すると合理的です。離婚率に至っては全国で最も低く、幸せな家庭を長期的に築いているように思えます。しかし実情は、家事、育児、介護といった過酷な多重ケア労働を、女性が一手に担わされているというものでした。離婚率の低さも、家庭円満のサインとは必ずしも言えません。「離縁された女は一家の恥」という男尊女卑の社会規範が、離婚の選択肢を奪っているからです。女が学なんぞつけるなと罵られ、跡取りの男子を産めと命じられ、夫や義父の暴力で身の危険にさらされる。1947年に廃止された家制度の呪縛は、50代以降の世代に未だ残り続けています。かたや娘世代は、大学進学率の上昇に伴い、従来の家族観を超えた選択肢が増えます。富山を出る選択もそのひとつです。「家にとらわれず自由に生きてほしい」。それは娘を想う母たちの切実な願いでした。若年女性の流出は喫緊の課題である反面、抑圧された母たちの願いが叶った結果ともいえるのです。

「独身じゃなくて〝単身〟って答えます」

私自身、29歳で帰郷してから、富山の保守性に息苦しさを感じてきました。東京には働く独身女性は当たり前に存在しましたが、富山では「子を産まない女は半人前」と言われます。厄介なことに〝女たるもの〟というジェンダーバイアスは、それを強いる男性のみならず、当事者の女性自身にも再生産されます。40代・管理栄養士のエミさんの場合、同性の先輩たちがそうでした。離乳食教室の講師を任された独身の彼女に、「子育て経験がないのに指導できるのか」と苦言を呈したそうです。もちろん、管理栄養士が母である必要はありません。エミさんは豊富な知識と現場経験を持った専門職として、粛々と職務を果たしました。このよう

な話は珍しくなく、だんなさんは？子どもは？　と悪意なく聞かれることもたびたびです。「今度からは独身じゃなくて『単身』って答えます」。周囲の偏見を軽やかにかわしつつ、自立した単身者として地域コミュニティに根付いていく。エミさんのように、地方で生きる選択をした女性の戦い方は、もっと知られていいと思います。

郷に従うも、自分で決めたい

多種多様な生き方が許容される大都会とは違い、私たちは前時代的な価値観を持つ隣人と共に暮らしています。「擬態するのは辛いですよ。自分を殺すからね。ひとつでも自分で決めたものがないと、腹の括りようがない」

そう語るのは、転勤族の家庭に育ち、生来の〝よそ者〟というユカリさん。夫の帰郷に伴い東京から移住して20年、排他的な村社会に対峙し続けてきました。郷に入れば郷に従うも、自分を押し殺してまで迎合する必要はないと考えます。彼女の言う「腹を括る」とは、自分の人生の責任を自分で引き受けることだと、私は解釈しました。

60代カズコさんは高校卒業後、20代半ばで職場の同僚と結婚。代々続く農家である夫の実家に入りました。義父の暴力に怯えながら、家事、育児、心の病を抱えた娘の看病、両親・義両親の介護に追われました。壮絶な多重ケア労働に人生を費やした彼女を、家父長制の犠牲者だと見ることもできます。女というだけで理不尽な役割を課せられる社会的構造は、いち早く作り直すべきです。しかし一方で、みずから役割を担おうとした彼女の意思決定は尊重されねばなりません。ケア労働をやり切ったカズコさんが、「大変だったけど今じゃ私の天下よ。旦那の作った料理で晩酌するのが楽しみ」とほほ笑んだ姿が忘れられません。ハタからは〝犠牲〟に見えたとしても、主体的に選択したという実感こそが、生きる原動力になり得るのです。

ままならない日々を懸命に生きている

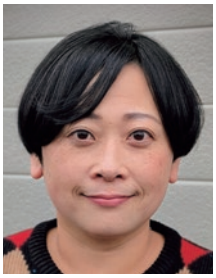
14人の中には、狭い人間関係の煩わしさを語る人がいれば、地元への愛着を語る人もいます。衆人環視に耐えられず富山を去った人がいれば、「富山の人は面倒見がいい」と好意を寄せる移住者もいる。〝地方〟という一言では括れないこの地には、ままならない日々を懸命に生きる女性たち、一人ひとりの人生が交差しているのです。

彼女たちに取材できたことは、私にとって得難い経験になりました。彼女たちの語りは、私の中で言い表せなかった感情を照らし出し、閉塞感を打ち破る新しい視座を与えてくれました。他者の人生を知ることは、自分自身の物差しが増えることであり、選択肢が広がることにつながります。『地方女子たちの選択』が、地方に生きる女性たちにとって、シスターフッドをもたらすことを願っています。

地方女子たちの選択

上野千鶴子・山内マリコ　著
藤井聡子　協力
桂書房（2025年）1,800円+税

社会学者の上野千鶴子さんと作家の山内マリコさんは共に富山の出身。本書は、富山県女性財団が主催した二人の対談イベントをきっかけに生まれた。メインは、富山でさまざまな選択を重ねて生きる20～60代の女性14人のライフストーリー。家父長制が根強いこの地で、彼女たちは何を選び、選べなかったのか。大学進学を機に「富山を出る」選択をした上野さんと山内さんが、女性たちの語りを踏まえて地方を見つめ直し、若年女性の地方流出の背景を掘り下げる。



profile

ふじい・さとこ

1979年、富山市生まれ。近畿大学文芸学部芸術学科卒業後、東京で雑誌編集を経た後、2008年に帰郷。「ピストン藤井」のペンネームで、富山固有の珍妙なスポットや人の魅力を深堀りするライターとして活動。13年、ミニコミ誌『文藝逡巡　別冊 郷土愛バカ一代！』を自費出版し、注目を集める。地元テレビやラジオ出演、北日本新聞で映画コラム連載を経て、2019年、富山への愛と自身の人生を赤裸々に綴った、『どこにでもあるどこかになる前に。～富山見聞逡巡記～』（里山社）を刊行。全国規模で話題になる。

若い世代にインタビュー

一人ひとりの自分語りが地域をアップデートする

女性として違和感や疑問を抱いても、声に出せない空気が漂う。心の内に抱える女性たちの声を聞き取り、可視化して発信する「地方女子プロジェクト」。その取り組みから、新たな希望が見えてくる。

「地方女子プロジェクト」代表
山本蓮

女性たちの声を可視化したい

生まれ育った山梨で「地方女子プロジェクト」を立ち上げ、さまざまな地方出身・在住の20～30代女性へのインタビューを続けてきました。若い女性が地方から都市へ流出していることが、人口減少の文脈で語られ議論されるとき、そこに当事者の声は入っているのか？　そんな疑問から、自分と同じような境遇にいる女性たちの声を集めて可視化したいと思ったからです。

インタビューをすると、繰り返し、同じ声が聞こえます。「地方では女性がキャリアを築く姿を想像しにくい」「帰省のたびに結婚や出産の話題を振られる」「お盆や正月、地域のお祭りなどの料理や準備は女性ばかりが担っている」こう思わせる伝統的なコミュニティの構造が、女性たちに「地域から出たい」「戻りたくない」と感じさせる要因にもなっています。

より深刻だと感じるのは、そうした違和感を口にすることをためらう空気があることです。「わがままだと思われてしまう」「周囲の人の目が気になる」など、インタビュー協力者のほとんどは顔を出さず匿名を希望します。地方のコミュニティでは、波風を立てないことや、周囲に合わせることが美徳とされがちです。その空気が、女性たちの声を静かに押し込め、選択肢を狭め、議論のテーブルにさえ上がらせないでいるのです。

変えていこうと行動する人々がいる

一方で、地方の女性たちが感じている〝課題〟を可視化させたいという私の願いは、近年少しずつ実現してきたようにも思います。みなさんも「地方女子」という言葉を目にしたことがあると思います。メディアで報道される「地方女子」は「地方は保守的で女性にとって生きづらい場所」として語られることも少なくないので、私もその傾向を助長してしまったと反省します。しかし、インタビューでさまざまな女性たちと出会い、講演や視察で各地を訪れる中で、変化の兆しも確実に感じています。地域の企業で働き方を変えようとしている女性や、地元で新しい活動を始める人にもたくさん出会います。「地元を出たい」と思う人がいる一方で、「この場所を変えていきたい」と考えて行動する人もいるのです。地方にも多様な女性の生き方があると、私自身も勇気づけられています。

最も印象に残っているのは、富山在住のAさん。30代のAさんは富山で生まれ育ち、地元のパートナーと結婚。不妊治療に取り組む途中で、「そろそろお子さんは？」という挨拶代わりのコミュニケーションの積み重なりに「家から一歩でたら全員敵だと思ってた」と言うほど追い詰められていました。しかし、市内の女性向け講座に参加する中で、自分と同じような思いをしている女性がこの地域にもいるはずだ、と不妊治療

都内で開かれたイベントでは、地元を出た女性たちの語りを聴いた　©ReikoWakai

や子どものいないパートナーシップについて話せるコミュニティを地元に作ろうと奮闘しています。

どこかにいる仲間との出会いがもたらす力

先日、長野県で、地域で感じているモヤモヤを語り合うイベントを開きました。参加者の一人Bさんは、チラシに記載された「お正月、私の休みはどこにありました?」「帰省するたび、結婚は? 子どもは?」という事例を見て、「私以外にも感じている人がいるんだ、社会的な課題なんだ」と驚き、思わず参加したそうです。Bさんはグループトークが終わると「適応できない自分がおかしいと思っていました。でも、同じことを感じている人がいるとわかってほっとしました。」と涙ぐみながら話してくれました。

地域を変えるカギは、「声をあげ、仲間と出会うこと」といっても過言ではありません。日常生活で感じる小さな違和感は、あまりに身近なために見過ごされやすいものです。「そういうものだから」と自分の中で受け流してしまう人も多いと思います。しかし、誰かの言葉をきっかけに、「自分の感じていたことは間違いではなかった」と気づく瞬間があります。「こんな所に仲間がいた!」という感動もひとしお、仲間との出会いがもたらす力は偉大です。地域に自分が自分のままでいられる居場所があることは、個人にとっても、地域にとっても、大きな転機になるはずです。

「自分語り上等!」を掲げて、「本音のおしゃべり会」を開催。
それぞれの違和感や経験から言葉が紡がれていく

あなたの影響力は想像以上に大きい!

仲間をつくった次のステップは、コンフォートゾーン（慣れ親しんだ領域）を抜けることだと思います。自分とは異なる年代・コミュニティの人と積極的に会い、意見交換や対話をすることで、新たな道が見出せたり、新たな仲間ができたりと、変わっていくことがあります。

「あなたの自分語りが、地域をアップデートする糧になります」これは私が地方でイベントをする際にチラシに載せているフレーズです。本気でそう信じているし、私には社会を変える力がある、と思える人の輪を広げていきたいと願っています。今から動きだそうとしている人も、すでに動いていて疲れている人も、あなたのリーダーシップは周囲に大きな影響を与えます。自分で思っている以上に大きな力がある! そう心に留めてほしいです。

・地方女子プロジェクト・

地方からの若年女性の流出課題に対して、「それって、私たちの問題なんだっけ」をモットーに、地方出身・在住の20～30代女性100人へのインタビューを実施。見えにくい当事者の声をSNSで発信するなど可視化し、社会構造の見直しと地方の未来を考えるきっかけとなるコンテンツを提供。「おしゃべり会」など対面イベントのほか、自治体や企業、大学などで勉強会を全国各地で開催する。

Instagram

profile

やまもと・れん

1999年、山梨県生まれ。都留文科大学卒業後、地元のIT企業に就職したのち、2024年「地方女子プロジェクト」を立ち上げる。25年3月、内閣府「若者・女性に選ばれる地方」に関する車座で、石破茂首相（当時）と意見交換。24･25年､NHK「クローズアップ現代」に出演し、大きな反響を呼ぶ。韮崎市男女共同参画推進委員。内閣官房地域・職場働き方改革推進会議有識者。内閣府男女共同参画推進連携会議有識者議員を務める。

WEBアンケートより

耳を澄ませて、目を向けて

今号の特集は、地方の女性たちが感じている「モヤモヤ」を尋ねることから始めました。匿名のアンケートには、女性たちの肉声が書かれていました。その一部を紹介します。

❖地方に移住して、いま賃貸に住んでいます。結婚しても賃貸と思っていましたが、友だちや上司から「この辺では夫の実家近くに一軒家を建てるパターンが多い」と言われました（実家から土地や金銭など援助を受けて建てる人もいるようです）。「せめて持ち家はないとね」という雰囲気があり、今も悩んでいます。

みお

❖仕事の選択肢がない。特に障がい者雇用は壊滅的。運転が下手でも車に乗らなければならず、移動するだけで疲れる。買い物といえばイオンくらいで、否応なく知人に遭遇する。鬱への偏見がひどく、ハローワークの職員でさえも差別的。民間の支援機関もほとんどない。疲れました。

匿名希望

❖私のまわりでは、男性も生きづらそうです。「長男だから・男だから」と選択肢が狭まれ、県外への進学を諦めたり、不向きな家業を継がされたりして、「家」に縛られているように見えます。結婚した男性は、実家の支援があってもなくても、車2台以上と家を持ち、妻子を養ってあたりまえ。そんな因習に男性が密かにモヤモヤしていたら、妻や女性にシワ寄せがいきます。地域を変えるには、生きづらさを抱える男性たちと連帯することも欠かせないと思います。

そばの実

❖結婚や出産への期待が強いだけでなく、「近所の〇〇さんは結婚した／していない」などとすぐにうわさが広まる。進学や仕事に関しても、〝珍しいこと〟をすると瞬時にうわさになる。常に「個人」ではなく「地域の価値観」という評価軸で見られる。

私自身も中学までは地域の価値観しか知らず、「型にはまらない自分がおかしいのでは？」と思っていた。地方では新しい情報や機会を得るチャンスや、それらをもたらすネットワークにつながる機会に乏しいため、性別に基づく偏見や差別が蔓延していることに気づきにくい。特に年長の方たちは、性別によって選択肢が限られていることに気づいていない場合が多い。若い世代に不自由な価値観を押し付けず、自由な選択を応援してほしい。

N

❖失業や離婚などで「人生のレール」から脱線した人に、地方はとても厳しいと感じます。年齢を重ねていればなおさら、再び就職して経済的に自立するのは困難です。再チャレンジする体力も気力も機会もなく、実家にひきこもるミドル世代は少なくありません。私自身もブラック会社を辞めてから、ひきこもり状態で孤立しています。本県にもYWCAのようなコミュニティや女性支援の場があればいいのに。

GMT47

❖地方での生活は、男尊女卑が根強いと感じます。それに抗おうとする私の支えとなったのは、〝子育て中〟のつながりでした。もちろん、地域YWCAとのつながりも！〝住めば都〟という言葉があるように、私にとってはここもステキな所です。都会ほど選択肢が多くないので、決断に迷うことはほとんどありません（笑）。「無い」ことに気を向けず、「有る」ことに気づくこと。せっかく地方に来たのだから、ここでしか味わえないことを、もっともっと楽しんでいけたらなと思います。最後に、遠くに住んでいる両親のことは気になるかな～。

KUすRO

編集部からのメッセージ

流されず見失わず、希望を灯し続けよう

必ず守ってくれる盾 憲法が壊されていく

期待や不安が入り混じる新年度ですね。でも私にとっては、2026年の初めからずっと心の中でアラートがザワザワと鳴り続けています。皆さんはいかがでしょうか。

2月の衆議院解散総選挙は、大義もなく、自民党の自己都合で行われたものでした。脱税に等しい「裏金」問題が未解決で、反社会的な旧統一教会との長年の癒着や脱法的な国民健康保険料逃れも明るみに出たのに、与党は選挙前後でそれらをほぼ省みることがありませんでした。「国民の厳粛な信託による」（日本国憲法前文）選挙だった気がしません。

選挙後に矢継ぎ早に打ち出された「スパイ防止法」「共同開発の武器輸出拡大」「国旗損壊罪」「議員定数削減」などの政策、そして「国民会議」「予算審議の大幅短縮」という国会運営。これらはすべて民主主義や、憲法に定められた「平和主義」「国民主権」「基本的人権の尊重」をなし崩しにしようとする動きに見えます。最たるは「憲法改正」の推進です。中でも「緊急事態条項」の設置は、内閣の権力の暴走を許し、国民の権利や自由の侵害に道を開く恐れがあります。これらの政策は私には、「国民主権」よりも「国家主権」を目指しているように見えます。個々人の生活や命、自由や権利の尊重よりも、国の力や威信を高める方向で一致しているように見えるのです。憲法に自衛隊を明記し、防衛力強化に賛成する意見も増えていますが、本当にそれでいいのでしょうか。

憲法とはそもそも、人類が圧政や戦争など多くの苦しみの果てに獲得してきた権利や自由を定めたもの。国民にとって本来とても大切なものです。憲法を遵守する義務があるのは、国民ではなく、為政者の側です。それが、今これを率先して変えようと言っているのは、為政者である政治家です。

自己と他者との対話から生まれるもの

複雑で変化が速く正解もない中で、不安や懸念は尽きません。そんな時は各自が、自分の心の声に耳を傾けることが大切なのではないでしょうか。疑問や違和感、心配や無力感、痛みや悲しみ、憤りを感じているなら、その感情を受け入れて眺めてみましょう。その問いや感情はいったいあなた自身のどんな心の願いとつながっているでしょうか――。

私自身の心に響いているのは、戦後3年間仕事をする意欲が生まれなかった祖父が、晩年「戦争は絶対しちゃいけない」と話してくれたこと。東京大空襲を生き延びたYWCAの大先輩の鈴木伶子さんが、日本国憲法を初めて見たとき「輝いて見えた」と語ってくれたこと。広島・長崎や沖縄で戦争体験者の声を聞いたり、読んだりしたこと。韓国や中国やアメリカやカナダで、戦争や植民地主義による加害の歴史を見聞きしたこと。これまで読んできた国内外の戦争体験者の言葉……。そんなすべてが相まって、「戦争しない、武器も持たない」という今の日本の憲法は、捨ててはいけない宝だし、次世代へとつなぐバトンだと心から感じるのです。

自分の心の声とつながりながら、疑問に思うことの事実関係を調べたり、信頼のおける情報源を吟味したりする。バラバラにある事実をつなげて考えたり、歴史を学んだりする。他の人と意見を交わしあったり、つながって声を上げたりする。小さくても私たちにできるそんな一つひとつをやってみることで、希望のともしびは、灯り続けると思うのです。

編集部会　西文子

エンパワーするNGO

YWCA

日本YWCAウェブ会員募集！

いま ここから ゆるやかにつながろう

女性としてモヤモヤすること、社会に対して疑問に思うことがある。
声をあげることが社会を変える一歩になる！　とはいっても、一人ではハードルが高いもの。

日本YWCAのウェブ会員制度は、いつでも、どこからでも、さまざまな女性たちとつながることができます。
オンラインから始まるゆるやかな関わりは、エンパワメントをもたらし、選択肢を増やし、可能性を広げます。

たとえば、各地の女性たちと〝自分語りの場〟をつくる。
自分と同じことに疑問をもつ人、自分にはない知見をもつ人と共に声をあげる仕組みをつくる……
そうして社会にさざ波を起こす。

山梨で「地方女子プロジェクト」を立ち上げた山本蓮さんは、自らの経験からこう断言しています。
「仲間との出会いがもたらす力は偉大です!」

この新年度は、ゆるやかにつながることから始めてみませんか。

日本YWCA ウェブ会員

オンラインでつながる。
新しい会員のカタチ

詳細はこちらから
https://www.ywca.or.jp/getinvolved/member/

YWCAについて
https://www.ywca.or.jp/

ご協力ありがとうございます

賛助費
青木惠子　赤石めぐみ　笈川光郎
尾嵜敦子　尾崎裕美子　小野田照代
梶原恵理子　金井淑子　河内常男
木村順子　桑原貴子　幸田良子
阪本和子　篠原洋子　髙木博己
辻加代　辻井夏子　牧甫
吉野恵子　和田崇子
宗教法人杉並中通教会
日本キリスト教会横浜海岸教会
福岡女学院中学校・高等学校
福島YWCA

ピースメーカーズ募金（平和を創り出す女性のリーダーシップ養成）
荒川知子　一色喜久代　大久保絹
尾崎裕美子　木村浩子　木村順子
後藤光彦　篠田茜　阪本和子
沢田修　柴田幸子　島崎真奈美
菅野真知子　関むつみ　瀧さをり
辻井夏子　鳥屋良枝　難波郁江
比企敦子　牧甫　三橋伸子
宮本政明　和田崇子　渡辺修一
株式会社フレックスインターナショナル
日本基督教団弓町本郷教会
日本基督教団久ヶ原教会
日本キリスト教団西千葉教会
日本キリスト教団聖ヶ丘教会
日本キリスト教団ひばりが丘教会
日本基督教団都島教会
日本福音ルーテル小石川教会 婦人会
活水中学校・高等学校
玉成保育専門学校
尚絅学院高等学校
学校法人女子学院
西南学院中学校・高等学校
社会福祉法人高倉ひかり保育園
学校法人玉川聖学院
山梨英和中学校・高等学校
マリア保育園
釧路YWCA
弘前YWCA
公益財団法人名古屋YWCA

災害時支援募金（国内外の災害被災者支援）
嘉屋陽子　和田崇子
日本基督教団扇町教会
東洋英和女学院大学附属　かえで幼稚園

（オリーブの木キャンペーン募金）
飯田幸穂　飯田真穂　市川恵美
上杉理絵　尾崎裕美子　柏舘直子
木村浩子　木村順子　桑原貴子
後藤亮　斎藤康代　阪本和子
佐々木真利　杉本陽子　菅野真知子
関むつみ　髙橋智恵　瀧さをり
近野玲子　千代木ひかる　富岡美知子
長尾有起　畠舞衣子　樋口香里
平井祐美子　三橋伸子　邑田明美
保田諭子　山口耕平　吉岡真紀子
合同会社阿蘇ジーザスフォレストリー
日本基督教団大阪淡路教会
日本バプテスト連盟下関バプテスト教会
日本基督教団扇町教会
日本基督教団浪花教会　澤山会
唐津ルーテルこども園
弘前YWCA
一般財団法人仙台YWCA
一般財団法人平塚YWCA
公益財団法人名古屋YWCA
大阪YWCA大宮保育園
匿名

（ウクライナ支援）
嘉屋陽子　辻加代　花輪正士
しまだゆうじ　俣野尚子　和田崇子
宗教法人日本キリスト教会豊島北教会
日本基督教団静岡一番町教会 子どもの教会
学校法人江別若葉学園元江別わかば幼稚園
一般財団法人平塚YWCA

（パレスチナYWCA支援）
大崎雅子　嘉屋陽子　しまだゆうじ
辻加代　牧甫　和田崇子
宗教法人日本キリスト教会豊島北教会
日本聖公会函館聖ヨハネ教会
日本バプテスト連盟札幌バプテスト教会
秋田キリスト教学園　いづみ幼稚園
明治学院高等学校
東京YWCAまきば保育園
新潟YWCA
公益財団法人東京YWCA
一般財団法人平塚YWCA
公益財団法人京都YWCA

（ビルマ／ミャンマー支援募金）
飯田幸穂　飯田真穂　遠藤真理
梶岡英之

東日本大震災被災者支援募金
恵泉女学園中学・高等学校 宗教部
日本キリスト教団佐世保教会
捜真女学校 同窓会・PTA
新潟YWCA

日本YWCAユースエンパワメント基金
辻加代　和田崇子

（2025年12月16日～2026年2月15日敬称略）

発行所 公益財団法人日本YWCA　〒101-0062 千代田区神田駿河台1-8-11　東京YWCA会館302号室
Tel. 03・3292・6121　Fax.03・3292・6122　office-japan@ywca.or.jp　www.ywca.or.jp
編集発行人 藤谷佐斗子／偶数月1日発行
旬な情報発信しています　メルマガ登録　y-net@ywca.or.jp　にお名前を送ってください ／ フェイスブック　www.facebook.com/YWCAJapan

メールにてご意見・ご感想をお寄せください。今後の紙面づくりの参考にさせていただきます。 office-japan@ywca.or.jp

無断での複写・転用・転載はご遠慮ください。